九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州大学新聞

https://hdl.handle.net/2324/1520581

出版情報：九州大学新聞. 396, 1956-12-05. 九州大学新聞部
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

九州大学新聞
発行所 福岡市箱崎町 九州大学新聞部
電話箱崎435内793
振替福岡13103
4頁15円・2頁10円
年300円・半年150円
発行人 柴田 譲作

電気暖房器具 東芝 日立 三菱
井手久
箱崎本通 TEL箱四四一二

第四回 九州地区大学文連行事開く

学生ゼミに画期的方向 だがバラバラな問題提起

学生ゼミ・演劇・音楽・美術

第四回九州地区大学連合文化祭は、さる十一月二十三日から三日間学生ゼミナール（九大法文経ビル）演劇祭（九大医学部中央講堂）音楽会（西南大ランキンチャペル）美術展（箱田屋）の四つに分れて行われた。参加校は地元の九大、西南大、福岡女子大など二十校。今年のこの催しは九州地区大学文化協議会と九州大学の主催によるもので各会場とも熱心な学生、一般人の参加をみた。次に各会場の様子を綴ってみよう。

× × ×

この討論は十二番教室満員の盛況のうちに二時まで行われ、担当のうちに散会した。

近経・マル経に共通な理解不足

商学部「生産性向上運動」

総会

商学部門総会は西南大教授の司会で行われた。

生産性向上そのものは労賃のことにおいても良いことである。すなわち技術的向上や無駄をはぶくことにおいて生産性向上は良いことである。ただし生産性向上における労働強化には反対であり、生産性向上運動には反対するとして行う生産性向上運動には反対する西南大の発表に対し、北九大、熊本商大から生産性向上をすることにより機械の改良、技術の向上が行われ、それによって労働者の賃金をあげることが出来るので、生産性向上運動に賛成するの立場をとり、他の大学からもそれぞれ、経済学、経営学の立場から賛成発言がなされた。

全体討論としてはマルクス経済学と近代経済学との二つの発言があり共通の理解が出来なかった（共通の言葉がない）また経営学と理論経済学とを混同し、理論経済学の一環としての経営学か、経営目体として分別されなかったようである。生産性向上はだんだん高くなっている。生産性向上と向上する人間が実せんすることにより、その意味の重要さから話合われた。

分科会

歴史における現代

「環境と教育」

発表者＝長崎大学、助言教官＝奥田、川口両助教授、教科書中心に経験中心で行くかについて討議されて、その中から封建性の問題が出、いかにして封建性を打破して行くかに問題がしぼられた。それを解決して行くことが青年教師の任務である。PTAをブルに活躍させる――などの意見が出て、問題は農村の貧困な状態に移って行った。そして最後に

一、教育を中心としたカリキュラムに経験をいれ、封建性や因習をなくすべきである。

二、そのためには先に父兄に接すべきである。

三、産業教育を通じて教育に関心をもたせる。

四、農村の中に組織を設ける。

など意見を交換しあってこの会を終った。

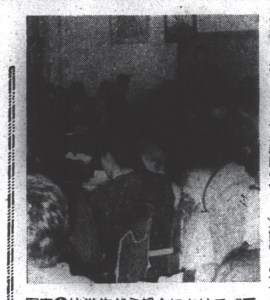
「教育制度」

九州大学が発表校になり二十五日午前中開かれた。

ここでは主に今年の二十四国会で成立した新教育委員会の問題点について話合われた。すなわちそれは地方教育の民主化の中にあってそれを破壊するものではないか、また教育の地方分権に反するのではないかという意見が出され、教育の民主化はどうあるべきかなどいろいろ討議された。

「教育財政」

熊本大学が発表校になり九大川口助教授の助言のもとに討議が行われた。ここでは行政と財政の二つの面から科学的調査研究小委員会で、天量制の扱い方、帝国憲法の批判が黙殺された点でかなり問題が含まれているが、ゼミ参加者の勉強不足で徹底的討論にいたらなかった。



写真上は学生ゼミ総会における『歴史における現代』のゴロッキー型式討論　下は文学部門総会

『現代』の概念規定の不足

平行線をたどる討論

それに特別参加として白沿会関係から高橋真（九大）長谷（九大）の両氏、以上八名が壇上に座った。議長田中慎一郎氏（九大）の司会のもと各部門から代表者が立ち、十分間づつ意見が述べられた。

まず"ハンガリー問題"に目を向けるとき、このような不祥事を引き起した原因がマルクス・レーニン主義自体の中に求められねばならないような感じがする。もしそうであるとしたら現代文学に大きな地位をしめる社会主義リアリズム自体に疑問を投げかけねばならなくなる。あるいは"現代は平和と反平和の観点から見ねばならないだろう"あるいは"現代は将来まずまず平和の線が重視されていく。しかしこの反面組織に埋没して個性ある顔を見失いつつある。もしこのことが組織自体の欠陥であるとしたらこのことをどう乗りこえるべきか"等々現代が担う問題が雑々出されていった。

この後コロッキー・メンバー同志の討論、一般聴衆との討論が行われたが、高橋教授の指摘しているように"現代"という概念規定がなされないままに討論が行われたので、各自の意見が同じ言葉を使いながら平行線をたどるようなかんじであった。

また現代のモラルから引きだされる大衆族の問題も部分的により上げられたが、時間の不足のため何らの結論も得ていない。

ここで舞鶴の添田教諭から、現在の小中学校において昨年の調査によると八十％の学校が教科書を絶対視していること、そういう現状では教育教科書の矛盾も相当にあることを話され、現場の教師の苦労を訴えた。

最後に山口助教授の評価を聞き五時すぎに討論を打ちきった。

文学部門

捉えにくい文学の感動 まだ足りぬ読書量

交学部門は助言教官の九大目加田教授、城野助教授が参加し、総会を"文学の感動はどこから来るか"のテーマのもとに、二十三、二十四日、『創作』と『批評』の二分科会を二十五日午前中に開いた。総会ではまず当番校九大より番指書の説明が行われた。

つづいて討議に移り、先ず感動とは何かについて、意味の限定がなされた。

「人間は種々の感動の要素を持ち、二者の要素がクロースした時に感動現象が起る。感動には個人的感動と集団的感動とがある」という福岡女子大からの発言は、助言教官より集団的感動というものは存在せず、集団の中にある個人に感動を与えるものだ」という発言があった。

「君の名は」などから受ける感動の限度は次の反論「普遍的な感動というものはない。感動はその場限りのものだ」が出、次に感動は社会、歴史を越えて持続するものもあるが、そうでないものもある。卑近な感動、責任を持たない感動は、持続性がない。持続性のない感動も、何かの役割をはたしている。という結論的な発言があった。また同時に、新日本文学（雑誌）に掲載される小説と『君の名は』などが受ける感動が質的に異る。これに関し、二者の感動の変化を考えて感動を与える。古典とはこういうものだ。またこの場合、感動というものは

ハンガリア問題

谷川助教授への反論

世界の潮流の中で捉えねば

解決は軍縮の成否に

案浦昌巳

九大新聞三九五号に載せられた谷川助教授のハンガリー問題に関する論文は非常に不十分であるばかりでなく、誤まりをも含んでいると考えます。この問題をめぐってデマと中傷が飛び交い、悪質な宣伝が広汎に行われている事態を考え私は自らの未熟さを知りながらあえて拙い筆をとる次第です。

先生はその論を三つの部分に分けて進めておられます。一では〝暴動の背景〟という題で、それを発的な事件としてではなく生まれるべき内的な原因を歴史的に解明しようとされています。が、これは十分成功しているとはいえません。何故なら先生は少なくとも文章に現われた限り（そこにおされた事件の重大さに幻惑されたためか）その原因を社会主義、人民々主々義諸国の政策上の誤まりにしか求めていないからです。ハンガリーの暴動が単に東欧諸国の支配を公然、非公然に進めてきた帝国主義者の手先によって生み出されたのだとする見解と同様にこれを『スターリン主義』の誤まりからのみ説明することは正しくはないが、また危険です。

谷川助教授のハンガリー問題に関する論文は非常に不十分であるばかりでなく、誤まりをも含んでいると考えます。この問題をめぐってデマと中傷が飛び交い、悪質な宣伝が広汎に行われている事態を考え私は自らの未熟さを知りながらあえて拙い筆をとる次第です。

先生はその論を三つの部分に分けて進めておられます。一では〝暴動の背景〟という題で、それを発的な事件としてではなく生まれるべき内的な原因を歴史的に解明しようとされています。が、これは十分成功しているとはいえません。何故なら先生は少なくとも文章に現われた限り（そこにおされた事件の重大さに幻惑されたためか）その原因を社会主義、人民々主々義諸国の政策上の誤まりにしか求めていないからです。ハンガリーの暴動が単に東欧諸国の支配を公然、非公然に進めてきた帝国主義者の手先によって生み出されたのだとする見解と同様にこれを『スターリン主義』の誤まりからのみ説明することは正しくはないが、また危険です。

第二次大戦後、アジアと東欧の一連の国々資本主義体制から離脱して社会主義の側に移って以来社会主義は不断に成長を続け、今では世界的な体制に発展してきました。それに対して資本主義体制内部は不安定で、その全般的危機は一層深まっており資本主義諸国の間にはその間と闘争が満ち満ちています。こうした異なった体制が並行して存在していることが現在の国際情勢の基本的特徴をなしています。

しかもこの両体制が、先生がともなげに書かれたように『平和五原則を社会主義国家と資本主義国家の平和関係を保障する共通の基本原則』と認めた上で積極的な平和共存をなしているのではありません。

ソヴエトと人民々主々義諸国に鉾先を向けたアメリカの大軍事基地がアメリカの国境から数千マイルもへだたっている国々の領土に建設され『共産主義の脅威』に対し防衛のために団結するという名目で軍事ブロック――NATO、SEATO、バグダード条約――が結成されています。こうした力の政策は戦争の危機をあおり立て国家間の不信を生み出し、緊張を激化させています。こうして『帝国主義が存在する限り戦争を生み出す経済的基礎が温存されていると共に、また、東欧諸国を『解放』するために西欧側で訓練されたファシストの残党をスパイ機関者が暗躍したことも事実でしょう。このことは『共産主義者の支配または占領下にある国の居住者またはそれらの国から逃避者をNATOの軍隊に編入しスパイ特務を養成する費用二億ドル』（MSA法一〇一条）がアメリカの国家予算でまかなわれているという公然たる事実が裏付けています。

このようにみてくると事態の発生の原因を先生が考察されたように国内にだけしぼるこの危険は明らかです。実際『自由の拡大と生活条件の改善を要求して』立ち上がった国民の民主化の運動を、国内にひそんでいた『旧小地主党などの反革命分子』が方々みに利用することによって武装暴動になったという問題は、『国内の問題』だけからは『理由』の説明を問わずソヴエト側の介入は比べてないしという結論しか出てこないでしょう。

暴動の背景をどのようにみる先生が二の部分でイムレ・ナジ政府が妥協して行く過程を述べ『ここにおいてソ連は反革命化したナジ政府を打倒し、社会主義勢力を擁護するために、ハンガリー政府の要請がなかったにもかかわらず、十一月一日大規模な軍事行動を行ったと断定されることは妥当に理解できます。

しかし、この部分は特に不正確なこと、モーリアックやカミュはハンガリーの作家連盟が全欧州の知識人に呼びかけたSOSに答え、国連に提案するところがあろうとしているとか、日本ペンクラブでも十一月十二日ハンガリーの作家ならびに知識人に深く同情を示せるものであることを、ロンドンの国際ペン本部に電報したとかいう記事があったこと、（以上十二月十三日朝日）しかしながら加藤周一氏などは、まだザルトルの発言なるものも、全文見ねばその真意はわからぬし、彼がソ連の武力介入をなんの反抗もなくうけいれたとか、ハンガリーの作家達がスターリン主義の誤まりを指摘したことを、ソ連の侵略行為を全面的に非難し、ソ連のハンガリーにおける虐殺に対し一人も抗議しなかったソ連の作家たちとは遺憾ながら絶交する」といったような誤まった結論をもたらすもの、